

■ 概説: ジョン・ボウルビイを偲んで

Dr. ジョン・ボウルビイ(John Bowlby; 1907-1990)は、私にとってなぜか‘懐かしい人’なのである。【タヴィストック】を振り返るとき、そこには今尚もマーサ・ハリスと並んで彼の顔が浮かぶ。ジョン・ボウルビイに個人的な恩義はないとばかり思っていたが、実は彼が【タヴィ】のチャイルド・サイコセラピイのトレーニング・コースの‘生みの親’だと知れば、なかなか深い恩義があることになる。かつて【タヴィ】で訓練生という‘雛(ひなっこ)’の一人であった私は、マーサ・ハリスという‘母鳥’の懷に抱かれ育てられたばかりではなく、ジョン・ボウルビイという‘父鳥’にも見守っていたのではなかったか。今改めて、【タヴィストック】を象徴する‘親なるもの’としての彼らを懐かしんでいる。それが内心ちよっぴり誇らしい。



私が【タヴィ】に在籍したのは1973-1979年だが、1976年にしばらく彼の講義を受講している。彼との関わりと言え、それだけでしかないのだが…。ジョン・ボウルビイは愛着(アタッチメント)理論でつとに有名であり、私の学生時代には既にルネ・スピッツやらハーローとともに、「母子関係の研究」で世界的に注目されていた方であったから概ね承知はしていた。だが、私は子どもの心理療法に専念していたから、彼が【タヴィストック】にいと知っても格別に関心が向いたようにも思えない。受講はおそらくマーサ・ハリスから勧められてであったのだろう。実際の彼の講義は談話調で、表情を崩さず、淡々と穏やかに、だが力強く、どちらかというところボソボソと話す感じだった。つい最近 YouTube で検索して、映像であの折のそのままのお姿を拝見したのだが、まさにこんな感じだったととても懐かしく、感慨深いものがあった。貴族の血筋を引く、アッパー・ミドル階級に特有な話し方なのだろう、何を喋ってるのやら、さっぱりなのだが、二度三度とよくよく聞けば、彼の語る言葉の描くところの軌跡が辛うじて辿れる。なかなか複雑で、そのニュアンスの綾の妙、かつ流麗さはなかなかに見事だ。あの当時の私の語学力では付いてゆけたはずはないと改めて思った。それでいて、分からないなりに心深く魅了されたというのが面白い。機智に溢れているというか、実に彼のお話が愉しかったのである！

ロンドンから出した姉宛の手紙を整理しているなかで、彼に触れている箇所があった。いろんなことが忘却の淵にあり、記憶が朧で、それを読みながらも、むしろ意外というか、あれっ、そうだったのかと驚いたぐらいだ。当時ジョン・ボウルビイの背景やら業績について私は無知に近いともいえたが、ただ皮膚感覚で素直に彼の講義に感動していた。そんな若き日の自分がまた心嬉しくも懐かしい。そのままをここに抜粋して載せる。

《…今学期から、ジョン・ボウルビイの講義に出ているのですが、彼、いい人なのよ。お年を召してらして、経験の重み(臨床プラスおそらく生活体験)があるというか、その融通性・弾力性のある人間味には、とてもこちらが感化されます。年をとることに希望を持った次第です。素直に驚き、感心した人ってのは、【タヴィ】でこの方が初めてです。…》(1976/11/2)

これだけの文章では、私の感激がいかなるものか詳らかではない。その本質を敢えて一言でいえば、<ここに‘フェアな魂’が一人いる>と感じられたことであったろう。それが【タヴィ】に帰属している上で大いに励ましとなったものと思われる。それでいて、彼と個人的にお話をする機会はなく、当時私は専ら子どものセラピーに没頭していたから、いつしか彼のことは忘れてしまっていたのだが…。ただ、唯一というか、懐かしい思い出としてあるのは、私が【タヴィ】でハンナのセラピーをしていた頃、待合室にハンナを迎えにゆくと、そこでたまたま彼と待ち合うことがあった。彼も自分の子どもの患者を出迎えにきていたわけ。まだまだ現役で臨床をしておいでなのかと感心したものだ。時折私の方へ彼の眼差しが向けられることがあった。挨拶をするほどの親しさはお互いにはないけれど、こんなところに珍しく東洋人がいると、自分の著作が日本でも翻訳出版されているのを思い出されておいでなのかしらとふと思ったり…。そんな交流ともいえない、瑣末な出来事が妙に嬉しかったりしたものだ。こうした私の思い込みは、随分とナウィーヴに聞えるかも知れないが、異国に暮らしていれば、自分が相手の眼(まなざし)には映らない、つまり‘見えぬ人’になっていると感じて傷つくということは往々にしてあることだ。それには慣れなくてはならない。だが、なかなか辛いものがあるわけで。つまりは疎外感なのだが。だから、ジョン・ボウルビイの眼に自分が映っていると敏感に感じて、それが慰めになったというのもごく自然なのだ。いずれにしても、大方の彼の階層の人間のように、‘異なるもの’を視界の外へと爪弾きしない。むしろ‘異なるもの’への好奇心を抱く謙虚さが彼にはあった。それは確かであろう。此の点でも、やはり【タヴィストック】の中でも彼は圧倒的に異色な逸材であったに違いないだろう。敢えてひと言でいうならば、‘バリアー・フリーの人’であったといえる。これは実に稀有な資質なのだ。

ジョン・ボウルビイは第二次世界大戦が始まってまもなく【タヴィストック・クリニック】に児童精神分析部門を立ち上げて欲しいという依頼を受けた。やがてチャイルド・サイコセラピーのコースの開設に当たり、ポーランドからの政治難民であったEster Bickを【タヴィ】に招聘し、コースの統括者として一任した。これだけでもかなりの勇断であったといえよう。彼は1930年代、クライン派のJoan Riverieから分析を受け、メラニー・クラインからはスーパーヴィジョンを受けている。当時の精神分析の大御所たる方々の殆どは大陸からの亡命者であったわけで、その彼女らのドイツ訛りの英語にはよほど苦労したものと推察される。私自身の英語力など比較に及ばないにしても、やはり母国語ではない以上、電報文のように‘要点’を繋げてゆくのが精いっぱい、正確さはともかく、語りとして情緒的な色・艶を出せるほどに無駄な装飾などは無理なのだ。つまり耳に心地いいものとは程遠い。アンナ・フロイトには直接私はお会いしてるし、メラニー・クラインの音声はテープで聞いたことがある。それにEster Bickとは電話で一度話した限りだが、率直なところ私には彼女らの肉声には耐えられない、苦痛でしかない。なぜに彼女らがあれほど彼の地で‘威張って’いられたのか不可解極まりないと感じていた。どなたも逞しい頭脳と強心臓と、それに強運の持ち主であることには間違いないが…。実にイギリス人は辛抱強い。ジョン・ボウルビイもビオンもマーサ・ハリスも、誰一人として苦情を言ってる者がいないのだから。むしろ丁重に彼女らに会っている。その寛容さには頭が下がるとして、やはり謎だ。もしかして「イギリス経験論」と「ドイツ観念論」がバトルしていて、前者が劣勢、後者が優勢ということなのかしら。そして煎じ詰めれば‘ロマンチズム Romanticism’の跋扈跳梁というわけであろう。クライン派に限らず、

精神分析に携わるうち、人は否応もなしに‘ロマンチスト Romanticist’になるべく運命づけられてゆくのだろうか。やがてそうしたごく自然な流れの中で、どちらかといえば実務家肌のジョン・ボウルビイはクライン派とは袂を別つに至る。だが、或時期のクライン派のロンドンにおける擡頭は、【タヴィ】がその拠点であったのだから、ジョン・ボウルビイの大きな懐に抱かれて起こり得たといってもいいのではないか。だとしたら、彼女らの冷淡さから推して、彼に存分に報いていないのがむしろ気掛かりに思う。

それから‘バリアー・フリー’の例をもう一つ。ジョン・ボウルビイは、ジェームズ・ロバートソンを【タヴィストック】へ自分の同僚として迎えている。当時ソーシャル・ワーカーであった彼は、第二次世界大戦中‘conscientious objectors 良心的戦争反対者集団’に所属していて、アンナ・フロイトとドロシー・バーリングラムによって運営されていた【the Hampstead Wartime Nurseries】のボイラーマンとして奉仕活動をしていた。そこに収容されていた養育者から引き離された幼い子どもたちの観察にジョン・ボウルビイは携わっている。この間、おそらく彼ら双方に意気投合するものがあつたのであろう。そして彼らは1952年にドキュメンタリー映画《入院する2歳児》を共同制作する。これは親による面会を病院側が制限しないためのキャンペーンに使用された。そして更なる研究のために助成金を【タヴィストック】に申請した。一度は認可されたが、直に却下されてしまう。いかにジョン・ボウルビイの手腕でも空振りとなつた。その理由は、おそらく、【タヴィストック】のお偉方は多かれ少なかれ、ジョン・ボウルビイにも似て、ナニーに育てられた上流階層出身のスノッパな人だったに相違なく、彼らにしてみれば不在の母親を恋しがって泣き叫ぶ子どもの姿など見苦しいだけでしかない。冷淡になるのは道理である。ロバートソン夫妻(James & Joice)が後に運よく他から研究助成金を得て製作した記録映画がある。分離不安(separation anxiety)を巡る子どもの事例である。ジョン・ボウルビイの講義の中で上映されたのだが、実にブラボー！なのだ。あの子どもたち一人ひとりが私の心に深く刻まれた。その哀しみやら憤りが…。別項に《参考資料》として【ロバートソン・フィルムズ】をご紹介したので、ぜひご覧いただきたい。

そういえばと、ふと思ひ至つたのだが、例のフランス人の産婦人科医・Dr. フレデリック・ルボワイエを【タヴィストック】に招聘したのもジョン・ボウルビイであつたらうと直感した。例のインドで撮影した赤ちゃんマッサージのドキュメンタリー映画《loving hands(愛撫する手)》は、私の知る限り、【タヴィ】の面々にはひどく不評だったわけだが(※)、ロバートソンの分離不安の子どもらの記録映画もなぜ【タヴィストック】のお偉方に冷淡にあしらわれたのかが分かる。自分に欠落したものを思い起こされることは苦痛だ。愛撫する手(loving hands)、それがナイことを想起されるのも苦痛だが、それがアルことを目の当たりにするのも苦痛であるということであろう。(※イントロダクションのページ、「無意識との邂逅」・エピソード集の中の「手なし娘の奇跡」を参照のこと。)

ジョン・ボウルビイの資質‘バリアー・フリー’について、もう一つ階級間の壁に纏わるものを語りたい。彼が講義のなかで、ちょっとした雑談をした。それが私に忘れ難い印象を残した。どういふ話の脈絡かは覚えていないが、それは、同僚のジェームズ・ロバートソンから直接耳にした、彼の幼少期のエピソードであつた。家の前の広場で子どもら同士がサッカーやら遊びに興じていて、お腹がすくと、<マミー、

お腹すいたア！>と住まいのあるビルの2階の窓の方に向かって叫ぶんだそうだ。すると、ほどなく‘ジャム付きの丸パン’が開いた窓から降ってくるというものであった！ごく自然に笑えてきた。なんとも微笑ましい、きどりのない、遠慮も要らない、まっすぐな母子間の交流ではないか。ジョン・ボウルビイは、それを淡々と語っただけだし、なんら自分の生い立ちと比較などしたわけでもなかったのだが。彼のようなアッパー・ミドル階級の子どもらはこうした母親に直接おねだりする、つまり甘えることが容易ではない。彼がジェームズ・ロバートソンの属する‘労働者階級(ワーキング・クラス)’というものになんら差別意識も偏見もないばかりか、どうやら羨ましいとすら感じていることが察せられた。胸を衝いた。人は‘無いものねだり’をするものだが、案外、「母性剥奪説(deprivation of maternal care)」やら「愛着(アタッチメント)理論」を始めとして、ジョン・ボウルビイの研究者としてのルーツはこんなところにあるのではないかと思われた次第である。

マミーの手作りのジャム付きのパンがどんなに羨ましいか、それは、子育ては万事使用人任せで、気まぐれで偏愛ぎみの母親を持ったジョン・ボウルビイの気持ちになってみるとよくわかる。実際に希求されているのは母親の「手の温もり」なのだろうが…。そもそもアッパー・クラスもしくはミドル・アッパー・クラスの子弟には<お腹がすいた>など飢餓感を訴えるなど思いも寄らない。食べ物の選り好みなども、もっての外なのだ。そのように厳しく躱されている。

一つそれで思い出すのは、例のイギリス料理で初めて出くわしたところの「バークトビーンズ(baked beans)」である。缶詰入りのインゲン豆のトマトソース煮であるが、それをトーストに乗せたのがランチとして目の前に出されると、屈辱を感じた。あんなの、‘豚の餌’じゃないかというわけでショックを受ける。一緒に渡英したオペアの日本人女性らの誰しもが一樣に、ホストファミリーのなかでお客様どころか、下婢に貶められたような衝撃と落胆を噛みしめたといった、恨みつらみのバークトビーンズなのである。食べ物の嗜好には差別がつきまとう。よくあんなもの、食べるわねといった蔑視にもなる。それは‘はしたない’といえば確かにそうなのだが、ところが、われらにとっては下等な食べ物でも、幼い頃から食べ慣れているイギリスの子どもらには結構なご馳走なんだというのは後から分かったことだ。英国王室のチャールズ皇太子と結婚したダイアナ妃だが、結婚式当初彼女のナニーがマスコミに注目され、インタビューに答えていた。<ダイアナお嬢さまは、私がお育てしたので、間違いございません>といった自信満々の風情の老女であったが、そのダイアナ妃が、《回想録》で語っている。例のバークトビーンズをトーストに乗せ、その皿を膝の上に抱え、テレビの前のソファーに座って食べるのが一番のくつろぎの時間だというのだ！その寒々しいともいえる‘貧しさ’には愕然とした。さすが、あのナニーに厳しく仕込まれただけのことはある。完全に飼い馴らされている。育児の手抜きもいいところなのだが…。マターナル・デプリベーションとはこれだろう。貴族ともあろうものが、案外、貴族だからこそこか…。

ジョン・ボウルビイが、フロイトの患者たちはすべてナニーに育てられたということを語っていて面白い。大概がユダヤ系の裕福な層の女性たちだとは聞いているから、それはあり得るとしても、彼がいうところの‘すべて’というのは今一つ信憑性が不確かだから何とも言えないが、ジョン・ボウルビイならばこそ

視点であろう。なるほど、フロイトは、臨床のなかで患者が自分に向ける‘母親転移’について愚痴つてる。辟易したらしい。その核心的部分に何が欠落しているかフロイト自身は見抜けなかったということになるのか。ジョン・ボウルビイが精神分析を擁護しながらも、そこに飽きたらず、‘母性剥奪説’という新たな地平を開拓せざるを得なかったわけが分かつたというものだ。そして最終的に彼が理論上辿り着いたのが‘安全基地(Secure Base)’という概念であった。これは即ち、マーサ・ハリスのいうところの<the experience of togetherness>ということだろうが、私にいわせれば、単純に母親に‘手を掛けてもらう’喜びといった内なる感覚と思われる。例えば、ジェームズ・ロバートソンの叫ぶ声<マミー、お腹すいたア！>に比べて、母親のジャム付き丸パンが2階の窓から振ってきた、あの瞬間の喜びだ！

ジョン・ボウルビイは、才気煥発な兄と知恵遅れの弟の間に生まれた次男である。ここに彼特有の気概、反骨精神、そして抑制のきいた慎み深さ、心傷ついた者への同情心など、総じてバランス感覚の良い人柄が育まれたものと推察される。彼は決して第一人称として‘母性剥奪’を語り得なかった人のように思われる。つまり私が私自身のために、例えば<I want you, I need you, I love you！>といった言葉とは無縁であつたろう。あまりにも控え目で抑制が強いのだ。その代わりにどうか、おそらくは知恵遅れの弟に思いの丈を投影し、つまり己れを代弁させて、第三人称に転換して語った。即ち、<He wants you, he needs you, he loves you！>といった類いの言葉である。彼の職歴の中で目を瞠るものがあるとしたら、積極的に不適応児・障害児・問題児らと交流し、彼らの肉声に直接触れていることである。A.S.ニールのサマーヒル学園と同系列の不適応児のための進歩的な学校に職を得るやら、ロンドン児童相談所に勤務していることなのだが。それらの体験は一貫して子どもらの問題に巣食う‘環境要因’を注視することを彼に促した。彼は実に人の話に耳を傾ける人であった。その歴大な聞き書きこそが彼の集大成《愛、分離そして喪失》の全3巻の書なのである。印象深いのは、彼が自ら<私の直観力は決してすぐれてはいない。その代わりとして、私は患者の問題を理解するために努力するという事を信条としている>と述懐していることだ。‘直観力’とは自分に根付いた、真っ直ぐないのちをいう。まさにそこに己れの脆弱さを彼は見たのであろうか。だからこそ直接多くの人の声に触れ、まずは良き聞き手となり、むしろ己れ自身が教えを請い、感化される必要があつたと認めたというわけであつたろう。この謙虚さは得がたい。それは究極にはいつしか己れ自身が、もはや‘誰かの声’をではなく、‘私の声’、即ち<I want you, I need you, I love you！>を心底語らんがためにではなかつたろうか。彼が【タヴィ】での講義でわれわれに語つたこと、そして彼が遺した業績の数々も、彼の最晩年の『ダーウィンの伝記』も含めて、そうした彼の心の格闘の軌跡として私は聞く。この思いこそ彼からバトン・リレーされてゆくことが望まれよう。

つい最近になってジョン・ボウルビイについてその業績なり人柄についてもっと知りたいと欲が出て、文献漁りしてみた。実に驚いた！クライン派との確執についてであるが。まるで知らなかつた。ただ彼が独立派(Independents)の人だということは承知していたけれど。<えっ、あなたもそうだったの？！>と、胸の内で私は呟いた。在英中も帰国後も私の内で呻吟を続けた、クライン派を巡る葛藤が何やら彼と大いに重なるのだ。ジョン・ボウルビイは語っている、<学会では単に子どもの心の内的世界

にのみ関心を払うべきであって、患者の人生経験に注意を受けることは真実からかけ離れていくことになると言われていた。私の児童相談クリニックでの経験は、私を反対の結論へと導いていった・・すなわち、人が実際の生活において経験してきた事象に照らし合わせた場合にのみ、他者の内的世界が理解し得るという結論である>と・・。

メラニー・クラインが外的現実に対して無頓着だったかどうかだが、おそらくそうであったろう。私が翻訳を試みた例の『児童分析の記録 I & II』(誠心書房)のリチャードの症例のなかでは、父親が難聴であるという事実には何ら触れられていない。Phillis Grosskurthの著したメラニー・クラインについての伝記(1986)でそれを知ったときには驚愕した。リチャードの父が日常的な会話ではラッパ型の補聴器を必要としていた事実は、リチャードの家庭環境、両親の夫婦関係、もしくは母子関係全般になんらかの緊張を強いたとはいえないか。Mrs. クラインはリチャードの治療開始に当たり、母親とは面談をしているが、父親とはしていない。何故だろうと私には違和感があった。リチャードもミセス・クラインが運転中の車から、通りすがりの父親に挨拶したと嬉しそうに言ってるから、父親が分析治療から排除されていることを些か気に病んでいたに違いない。難聴者だとしたら、腑に落ちる。それでリチャードの分析治療の経過についての‘読み’がまったく違ってくるともいえないが、彼の気持ちが‘分かる’ためには、知ると知らないでは大違いの重要な外的情報ではないか。この例からしても、やはりジョン・ボウルビイの提唱する、外的現実の視点の取り入れは検討に値する。想像(phantasy)という内的世界か、もしくは外的現実という経験的事象か、どっちがどっちかというと尚も議論が沸騰する。おそらくどちらの側にも真実はあるのだから・・。

私にとってもこれは他人事ではない。私のパーソナル・アナリシス体験がまさにその渦中にあった。内的現実但凡てが焦点づけられることの違和感が募っていった。私の両親・山上昇&ツル工は私の外的現実になる。それ故に解釈で云々されることは皆無であった。むしろ、‘Now & Here’の転移として扱われるから、ミス・ウエデルに対してもしくはメルツァーに対してという具合であった。これはどうしても承服できかねた。私の内的現実を形作り彩る‘素材’もしくは‘糧’としての我が両親にミス・ウエデルの関心が何ら向かないというのは異常とすら思えた。それは「拉致の感覚」である。自分の知らないうちに居るべきところから連れ去られ、縁も所縁もない人々のなかにさ迷っているという違和感である。悪いことに、私は幼少時、もらわれっ子体験をしている。だからボウルビイの言うところの【安全基地】に対する磐石な思いに欠ける嫌いがある。この躓きの石が大きく立ちはだかっていた。いふならば、人見知りが強い。社交性はそこそ身に付いてはいたし、義理堅いところがあるから、恩義のある人には礼を尽くす。だが、なかなか簡単には人になつかないところがあった。‘一皮剥ける’という言葉があるが、異国体験は‘一皮被る’ことになりかねない。だが、親とのことになれば、話は別だ。文字どおり、‘へその緒’というか、‘命綱’なのだ。そして、ある事件をきっかけに私の抵抗感は爆発した。私の父親が会社で作業中に事故に遭ったという知らせが入った。背景に夫婦間の不和があり、諍いの種とは私の留学を支援するか否かを巡ってのことであると直感したから、気が動転した。今すぐにもイギリスを引き揚げて帰国せんばかりの勢いだった。その折りミス・ウエデルは明らかに焦った。そして、判断を誤った。

私に、直ぐさまに親元に手紙を出し、トレーニングの継続のために必要な経済的援助を仰ぐようにと示唆したのだ。信頼は壊れた。父親の容態を知らされるまで、生きた心地もなかったことを思えば、その時点での彼女の判断はやはり性急であったといえよう。親から支援を取り付けることの大変さを訓練生一人ひとりがどう対処しているのかよくは知らないが、因みに、ポウルビイの母親は彼が精神分析家になることに反対したんだとか。自分の手を汚さずに子どもを大きくした彼女には、上澄みの綺麗事にしか興味はなく、無意識などという心の闇やら澱(ヘドロ)など知りたくもなかったろうし。知的障害を持つ子どもが一人いるだけでも屈辱なのだから、その上に恥さらしは御免だというのも分からなくもない。それで彼が彼女からの経済的援助を絶たれたとは聞いてないが・・・この件では訓練生の誰しもが一樣に悩むことで、親とのバトルは避けられない。だが、おそらく彼の分析家 Joan Riverielは何ら関心を向けなかったろう。彼と同じような階層出身の彼女にはジョンの母親についての非難には触れ得ない個人的な事情があったものと推察される。ジョン・ポウルビイのクライン派との確執はここに根差していないはずはない。両親のこと、彼が使用人任せで育てられたこと、母親が分析に反対していることなど、実にこうしたパーソナルな事柄に分析家が外的現実として一顧だにしないというのはやはり異常だ。パーソナル・アナリシスがこうした厄介極まりない外的現実を無視したり、回避することがあってはならない。人間としての誠意の問題だ。親を付き合い合わせさせておきながら親を叩き台・踏み台にして自律心を養うというのも虫のいい話だが・・・。こころを回避すると、患者を親に寄生させて当然と見做すことになる。この点、分析家も寄生する患者と利害が一致するわけだから、加担し、自らも寄生するという罠に嵌る。それを避けるためには、この外的現実を共に見据えてゆく必要があるだろう。内的現実にしたってそうだ。気の咎めを軽んじてはならない。私の姉も妹もついぞ親にこれ程依存することなどなかったのだ。私に負い目が無いという方がおかしい。親しかパトロンはいなかった、だが彼らを‘搾取’したという負い目は生涯消えない。分析家を変えたいと思ったが、マーサ・ハリスもジョン・ブレンナーも、その件では容易に承知しなかった。要するに、そこに踏ん張って、思いの丈をミス・ウエデルにぶつけろということに尽きた。トレーニングについて親が無理解だとか、それで経済的支援を取り付けることが困難などとはあちら側にとでも話せはしない。蔑まれることを恐れてである。日本人としてのプライドも意地もあったし。期待してくれる彼らを失望させたくはないとの思い、それでどれほど無理な背伸びしていたとか、その皺寄せを両親が受けたのは紛れもない事実だ。そして私の当時の器量では、とてもジョン・ポウルビイのように徹底抗戦はできかねた。私が飽くまでも臨床の現場に根差していたということもあろうが。まだまだ彼らと袂を別つには時期尚早であると観念した。しかし疑念はずうっと燻り続けた。それでミス・ウエデルを大いに手こずらせたという記憶がある。彼女はそんな私によく耐えてくれたともいえる。そして帰国後に私が両親に再会したとき、やはりというか、案の定、実に私の気持ちは強張り、冷ややかなのを認めた。ジョン・ポウルビイのいうところの感情欠損(affectionless)である。彼らに対して恩義は恩義として、妙に心に距離があった。自分の内側を覗きながら、呆然と立ち竦んだ。なにやら自分が許せないと思ったし、あの分析は失敗だったという疑念が一瞬頭を過ぎた。どう仕切り直しをしたらよいものかと考えあぐねていた。しかしながら、英国でのすったもんだの奮闘のお蔭で自律心が培われたといえいいのか、私は敢然と前へと踏み出した。ほとんど文無しで帰国してるから、東京・原宿で居を構えた折しも、家具一式を買い揃えるのも父親から借金をした。それも当時父親は肺癌

と診断され、大塚にあった【癌研】に入院している真っ只中であつた。そんな危機的状況においても不思議に私は動揺しなかつた。武田病院にパートで通いながら、個人開業に備え、着々と準備に余念がなかつた。小此木啓吾先生の肝いりで、自宅でセミナーが開始されようとしていた。当時私はそれなりに両親の役には立つたろう。だが父親にも、介護で寄り添う母親にも格別優しさを表す余裕はなかつた。気持ちの裏側では、そうした自分を許せないと気の咎めをうつつら覚えていた。手術後の父親の快癒を待ち、仕切り直しには両親に付き合ってもらふことだと心を決め、休暇の度ごと舞鶴の実家に向かうことが続いた。『私の精神分析』が真にいかなるものになるのかが問われていた。当時から私のもとを訪ねてくる分析患者たちの殆どが、一般の人も専門職の人もだが、親とのことを綿々と語つた。親との軛に絡めとられ、わだかまりで足を掬われ、ままならぬ身を嘆き呻いていた。彼らに付き合うことは彼らの親にも付き合うことだと観念した。むしろ親を抱えることを彼らに手助けしたことになる。彼・彼女が自らを抱えんとするためにも…。精神分析とは畢竟‘自らを贖(あがな)わんとする’ものだとの思いに至つた。そして彼らと手を携へながら、常に精神分析への信(faith)というものが私の念頭にある。

マーサ・ハリスは夫であるローランドが亡くなってから、やがて دونالد・メルツァーと恋に落ちた。二人は「内的対象が同じだから」という理由で結婚に合意したと伺う。これを聞いて一瞬、私はなにやら危ういと感じた。彼らのいうところの‘内的対象’とはそもそも誰を指すのか、メラニー・クラインなのだろうか。己れの生とは徹頭徹尾固有であるからして、同じ内的対象をもっていることが愛したり愛されたりする決め手にはならない。これは当人同士以外の者の預かり知らぬこととはいえ、クライン派特有の‘内的現実至上主義’は時として危ういと思われる。その一方で、それほどに‘内的対象’にこだわり、徹底し得る彼らの信(faith)こそが羨ましい。それに比べれば、私自身の不徹底さが恨めしい。心底ほんとはかなわないと思う。彼らを越えられない悔しさがある。だが日本に戻り、とことん‘現実主義者(リアリスト)’になるしかなかった私としては、やはり内的世界も外的世界もどちらも視野におくのがよろしいかと思う。Dr.メルツァーはロマンチスト(理想主義者)という専らの噂だけだ。おそらく私もロマンチストの末裔の一人なのかもしれないとして、ただいわゆる‘夢想家’にすぎないというのも剣呑に思われる。

ジョン・ボウルビイについて、一般的にはクライン派と対立した人という評価だが、彼の業績はそのクライン派との相剋を経ながら、彼女らを叩き台・踏み台にしてこそなのだ。事実彼の著作活動は、たとえば冷遇視されようとも、クライン派に対しての粘り強いアピールを意図していたのだから。安易にそこを切り取ってはまるで意味がなからう。彼の『愛、分離そして喪失』全3巻を読み終えて、ふと思った。彼はそこから新たにクライン派に戻る道はなかつたのだろうか。何やら惜しまれてならないのだ。今や彼の衣鉢を継ぐ post-Bowlbians の人たちの心理臨床では専ら‘自叙伝的自我’を物語らせるといった手法を取っているらしい。だが過去を回顧的に叙述するだけならば、器用な辻褄合わせで終わってしまう。己れの過去の振り返りとしてそれも意味がなくはないだろうが、やはり転移と逆転移が切り結ぶところの場の‘自発自転’という動きでしか、自己は未来を孕むことはない。要はとことん因縁を生きることに尽きる。今がもしも未来を創つてゆくものならば、人と人との因縁でしか紡ぎ得ない。分析の場で起こりうることに希望があるとしたら、そこにしかない。怖いといえば怖い。面白いと興がれば実

に面白い。有難いといえば実に有難いものなのだ。やはりメルツァーが面白いと思うのはそこだ。精神分析は未来に向けて人間が‘弾けて’ゆく、その面白さこそが命なのだ。それからもう一つ付け加えるなら、post-Bowlbians セラピストらが基本的姿勢として【安全基地】を主張するのは技巧的な‘絵空事’に陥りかねない。むしろその職業的(professional)な体裁を超え、分析家・セラピストとは飽くまでも患者という一人の人(person)と深い因縁を切り結ぶ一人の人(person)としてあることが肝要だ。

ここに想起されることがある。【タヴィ】での集中的(intensive)セラピーの症例ハンナである。彼女の両親はハンナの分析治療と並行して、二人のケースワーカーと親面接を受けていたのだが。あちらはあちら、こちらはこちらで、その面談内容などの詳細について双方の情報交換は控えられていた。時折にBrian Truckleの顔を見た折などにはちょっとお喋りをするのがあり、そこで漏れ聞くとところから多々示唆を得ることがあった。ハンナは私に向かって吼える、<I hate you, because you do not love me ! (あなたのこと憎んでやる、だって私のこと愛してくれてなんかいないじゃないのよ)>と。これは実のところ、彼女の母親が夫を玄関の扉から外へ閉め出し、吼えるのとそっくりそのままなのであった！ハンナのセッションの中で、私は折々に一体私は誰を相手にしているのやらと茫然自失することがあった。親たちの中にくすぶり続ける‘小児的な’恨み・嘆き・鬱憤・疑念やらがハンナにそのまま投げ込まれている。それをセッション中、彼女はまさにアクティング・アウト(acting-out)する。勿論それらは彼女自身のもので転移の中で取り扱うしかないわけだが・・・やがて分析治療の後半になった頃だが、休暇明けに彼女はセッションに戻ってきた。私が彼女に<Miss. Yamagami は戻ってこない、居ないんじゃないかって思ったかしら？>と訊いた。すると彼女は返答した。<No, I know I am a person with you・・・(そんなことないわ。だって私は‘あなたと一緒にいる人’だって知ってるもの)>と。私がさらに、<そうなの？じゃあ、私もpersonなのね>と訊くと、彼女は沈鬱な面持ちで、<Yea, That is the problem (そう、だから問題なのよ)・・・>と言ったのだ。さすが！だと感嘆した。たかが9歳の女の子なのだが、利発な彼女は親を超えた。親たちから投影されたものを自らの内で‘浄化’したことになる。つまり彼女は自らを贖ったというわけだ。ついでに親たちをも・・・なぜなら、自己の対象が一人の個人(パーソン person)であること、それを認められないところにそもそも彼らの‘躓きの石’はあったのだから。それを乗り越えることでしか、成熟した人間関係は成り立たない。かなりのインテリでかつ聡明な彼女の親たちもどうやらハンナと同じ道筋を歩んだようで、やがて‘優しさ’に辿り着いている。それは誰しもにとって重い課題であり、長い心の道程となることは必至であろう。

児童分析の知見では、愛する対象(love object)の中にナルシズムやらエゴイズムを見ることに子どもは頑強に抵抗し、否認する。そもそも分離不安とは、そうした対象の一個人(person)としての‘独自性・固有性’に向けられた憎悪もしくは羨望に繋がりはしないか。ジョン・ポウルビー及びMr. & Mrs. ロバートソンが製作した‘分離不安の子ども’の記録映画が殊更に貴重なのは、あの子どもたち一人ひとりの心の傷つきがわれわれに深く衝撃を与え、かつ回顧させるからだ。あの時、あの瞬間、自分がどのように躓いたか、そして今尚、己れのうちに躓きとしてあることをも・・・【安全基地】を模索する心の営みはここから始まるしかない。因みに、ジョン・ポウルビーの墓石に刻まれた碑文に《一人の

巡礼者(ピリグリム)ここに眠る》と書かれてあるとのことだ。実に感銘深い。いつしか心の内なる【安全基地】に辿り着くためには長い苦難の道程を歩むであろう、そのとぼ口に立って嘆き悲しむ子ども一人ひとりの姿に深く彼は共感し、又彼自身も一巡礼者として、生涯彼らの道連れとなったのであろう。

帰国後の私は、しばらく日本の詩歌を読み耽っていた。その折にたまたま出会ったのが高村光太郎の《母をおもふ》という一篇の詩である。強烈な‘カルチャー・ショック’を受けた。ここに謳われている感覚はいのちの根源を支えている何かだ。しかも異国ではついぞなじみがない。ここにこそ【安全基地 secure base】という概念が克明に活写されてはいないか。ああ、なるほど、ジョン・ポウルビィが恋焦がれ、探しあぐねていたものはまさにこれだという感慨を抱く。詩篇《母をおもふ》は下記のとおりである。

夜中に目をさましてかじりついた
あのむつとするふところの中のお乳。

「阿父(おとう)さんと阿母(おかあ)さんとどつちが好き」と
夕暮の背中の上でよきかれたあの路次口。

鑿(のみ)で怪我をしたおれのうしろから
切火(きりび)をうつて学校へ出してくれたあの朝。

酔ひしれて帰つて来たアトリエに
金釘流(かなくぎりう)のあの手紙が待つてみた巴里の一夜。

立身出世しないおれをいつまでも信じきり、
自分の一生の望もすてたあの凹(くぼ)んだ眼。

やつとおれのうちの上り段をあがり、
おれの太い腕に抱かれたがつたあの小さなからだ。

さうして今死なうという時の
あの思ひがけない權威ある変貌。

母を思ひ出すとおれは愚にかへり、
人生の底がぬけて
怖いものがなくなる。
どんな事があらうともみんな
死んだ母が知つてるやうな気がする。

ここに高村光太郎が語っている母親像は、確かにジョン・ポウルビイの言わんとする【安全基地】の忠実な鑑とも言える。事実として、光太郎の母なる人はあつぱれ苦労人というべきか、妻としても母としてもほんに気立てのいい、実に‘無私’なるお方であったようだ。私の心が引っ掛かるのはこのことだ。何やら羨ましいやら痛ましいやら、言葉を失う。もはや明治は遠くなりけりというか、悔しくもあの時代の女には戻れないというべきか。ここに大きな障壁が立ちはだかる。母親であることと一人の人(person)であることは相容れないものだろうか。‘母性愛’は‘小児万能感 infantile omnipotence’にいたずらに迎合するほどに盲目であってはならない。‘対等’をお互いに生きること、男女が、夫婦が、そして親子ですらも、それをぜひとも夢みたいものだ。大正・昭和初めのモダンな、或る一つの新しい夫婦の形ともいえた、高村光太郎&智恵子の実験的愛の営みの破綻という悲劇を振り返るとき、それはもはや昔話ではない。今尚私たちは決着の付かない煩悶を抱えているといえよう。ポウルビイにしる、ウィニコットにしる、われわれは対象に固有なる自己愛性(ナルシズム)をどう甘受し折り合うべきか、その心の道筋を示すには至っていない。まずはマーサ・ハリスの《the experience of togetherness (一緒であること)》の感覚を掴んでみたらどうだろう。恐れずにく付き合ってもらいなさい、付き合っあげなさい>と言いたい。そうしてこそ、内的対象並びに外的対象、どちらにおいてもそれぞれに‘私性(私なるもの)’の復権を甦らせることになりはしないか。それこそが臨床家としての課題と思われる。

ここで問われている課題とは、私たちがセラピストとして一人の個人(person)であることにどこまで耐えられるか、どこまでそうした存在として日々臨床の中で患者と向かい合えるかということに尽きる。帰国後、私は後進の指導に携わりながら危惧を抱いた。個々それぞれがセラピスト以前に一人の人(person)であることが阻まれている、まるで希求されていない、そんな精神的ひ弱さを感じてきた。特に女性たちがそうだ。つまり、‘無私性’から何ら一歩も出ていないともいえた。職業人としての忠義心から患者に寄り添うことに懸命になるだけで、だから‘お守り・子守りのセラピイ’止まりということになる。対象愛(object love)の希求とは、そもそも対象自体に本来備わる「私という固有性」を認めることに抗い、葛藤し、心が修羅と化すことから始まる。セラピイの眼目とは実にそこにある。近代自我の目覚めもそこに基因する。そして日本の女性にも近代自我の萌芽は芽生えんとしているともいえよう。だが、欧米に比べれば格段に遅々としたものに思われる。その因を辿れば、男性が女性に‘無私なる人’以上のものを認めたがらないということはないか。この業界でも隠然としてそれが罷り通っているような気がした。指導を受ける段階でスーパーヴィジョンという名を借りて主体性が牽制され、専門性を培うという名目で私性が否応もなしに無にされる、そんな抑圧が始まっている。その抑圧はあちこちに連鎖する。そして人間が潰されてゆく。そんな懸念を抱く。‘私’やら‘自分’を無闇に振りかざすことを忌む風潮は、家庭でも、教育の場でも、職場でもある。そこに敢えて抗せんとするのは、精神分析が科学でもありアートでもあり、まさにいのち(もしくは感性)の伝達であり、そこに真骨頂があるからだ。この伝統の流れは、光と闇とが錯綜し大きな渦となり、時としては異説やら異端を生み出し、かつそれらを抱え込み、奔流してゆく。そしてどこか知らないところで‘伏流水’として人のいのちを潤してもゆくであろう。そうした流れのどこかに自分もいると思いたい。ジョン・ポウルビイもマーサ・ハリスも…。そして多くの忘れ難い顔々が脳裏に浮かんで消えてゆく。しばし樂觀してみようと思う。(2013/09/20 記)